

---

## Lost tale

おちゃめな豆大福

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Lost tale

### 【Nコード】

N8372X

### 【作者名】

おちやめな豆大福

### 【あらすじ】

日本最大級のフルダイブ型のオンラインゲーム『Lost tale』

一般職、上級職、犯罪職、孤高職、ペナルティ職や神話をもとにしたストーリーを売りとしたゲームである。

そんな中、主人公と愉快（＝不愉快）な仲間達が会社に届いたハツキングの予告を止めるべく暴れまくる！！

## プロローグ（前書き）

書いてはあきらめ、書いてはあきらめるおちやめな豆大福です。

ですが！！

今回はあきらめません！

だって兄貴や友達が協力してくれたから！！

もしよかったら感想、もしくはアドバイスお願いします。

## プロローグ

「助けてください!!」

か弱そうな少女が大柄の男に助けを求める。

男は背中に剣、左手には盾を持っている。どちらも上位クラスの武器だ。

対し少女は、赤い宝石がはめられている杖を手に持っているが明らかに弱そうだ。

「ど、どうしたんだい？」

男はうるたえる。

いくらゲームと言っても馴れていない人にとっては怖いものだ。それが怖がりの少女ならなおのこと。

「あ、あの魔物に勝てなくて・・・」

少女が涙混じりの声で必死に男に伝える。

男が少女の後ろを見るとバグウルフが二体。

バグウルフ自体はあまり強くないのだが、バグと言っているだけに一体一体の特性が違う。

「くっ・・・!!」

男は少女を後ろにし、剣を構える。

「せやっ!!」

男はバグウルフ二体にダンスブレードを仕掛ける。  
ダンスブレードとは剣を乱舞する中級技で威力も高い上に攻撃範囲も広いという中級者には重宝される技だ。  
本来ならこの一撃で決まる

「な．．．っ!？」

はずだった。

ダンスブレードは見事に外れていた。しかも二体とも。  
なにか起きたのか分からないといった顔をしている男。  
Lv65の男にとっては、推奨Lv40の魔物などは楽に倒せるはず。

しかし今回はカスリ傷すらつけられない。

(どうということだ!?)

男は急いで振り向く。が、振り向いた先にいたのは魔物でもなく少女でもなかった。

そこにいたのは三人組の男。

一人は青っぽい髪に将校のような装備、もう一人は髪が赤く黒い革ジャンを着ている。最後の一人は茶髪でいかにもチャラ男風の男。

「ど、どういっ」

「

不意に茶髪の男が目の前から消える。  
そして言い終わる前に男は死んだ。ゲームオーバー

男が完全に消えた後、三人組の男達は街に向かって歩き出す。

「いやー、大量大量。ザツクザクだぜ」

「みんな、まんまと引っかかりますね」

「当然だろ」

上から順にチャラ男、将校、赤髪が話す。

男達はあの後男から金を盗んでいた。

「さあて、もう一人くらいやるか？」

「いや、思ったより儲かったからいいんじゃないね」

話していると街に着く。

中級者用の街『ヘイム』。一番多くの人が集まる人間用の街。

ロストテイルでは初めのキャラ作りに人間、精霊、獣人の中から種族を選ぶ。

そして、それぞれの種族の間にはグランドラインと言った大きな堀が存在し、混ざらないようになっていいる。

「さてと街に着いたし、今日は解散かな」

チャラ男はけだるそうに背伸びをする。

まるで、猫のようだ。

「……？……あれなんです、先輩？」

「んああ？」

チャラ男は間の抜けた声で返事をし、指をさす方へ顔を向ける。

「っつ!?!」

チャラ男と赤髪はあり得ない光景を目にする。

PCがNPCに襲われていた。遠いため悲鳴やら何やらは聞こえないが確かに襲われていた。

この世界はゲームでできている。 ロストテイル Lost tale という名のゲームだ。

ゲームには絶対いると言っているほどにNPCはいる。

しかし、そのNPCが急にPCを襲うことはあるのだろうか。しかも 非戦闘区域 街の中で。

(イベントか...?いや、それにしては...)

見た目が変わりすぎている。

いきなり花屋のNPCが人外のような黒い影の化け物になったりは普通ならない。

だが、今言ったことは事実となっている。

襲われている方はへらへらと笑いながら拳を構えている。格闘家のようだ。

黒い影と格闘家は対立している。

一触即発といったところだろうか。使い方があってるかは知らないが今にも戦闘が始まりそうだ。

と言っても、街中のNPCは全て ロール レベルという設定になっている。

男達はそのままだ動かずに様子を見ていた。

格闘家は牽制するように左手でジャブをする。黒い影は一応ダメージをくらっているようだが致命的なダメージではない。

どうやら格闘家は遊んでいるようだ。でなければ影は今頃消えさせているだろう。

周りにも観客が湧いてきた。

ある程度観客がたまったところで思いっきり右ストレートを影に向かってかます。

それと同時に歓声が響く。

「いいぞー、嬢ちゃん。やれー！」

「負けんなよー!!」

遠くにいても聞こえるくらい大きな声だ。

しかも格闘家の人は女性らしい。

しかし影は消えない。さすがに彼女も観客も驚く。

NPCが黒い影になったから多少の強化はされているだろうが元LV1と中級者だ。格が違う。

お返しとばかりに影は先ほどくらった右ストレートを真似て彼女にくらわせる。

HPが半分以上も減る。

攻撃の速度自体はそこまで速くないのだが動揺していた彼女には反応できなかったようだ。

さらに追撃をかけようと右腕を振りあげている影に対し、彼女はただ単に呆けている。

「チツ．．．!!」

チャラ男は舌打ちとともに消える。

だが、つまらないからといってログアウトしたわけではない。

ザシユッ

「．．．．．。」

むしろ助けに来たのだ。

チャラ男は無言で影を葬る。

戦闘への乱入は基本OKなのだがあまりいい行為とは言えない。

「「「．．．。」」」

静寂だけがこの場を支配する。

奥の方ではNPC達が井戸端会議のように話している。

「あれって盗賊でしょ。役人言っただ方がいいのかしら」

「でも後で報復されても怖いしねえ」

（全く、またこれかよ）

彼が助けた女性は立ち上がる。

「あ、あの。ありがとうござい」

「お礼は言わない方がいいぞ」

お礼を言うと君も仲間に見られるから、という言葉は飲み込む。

格闘家の女性はうっと言ってうなだれる。

ちなみに周りの観客たちはそれぞれ別の場所へと消えて行った。

「ん、じゃあな」

彼女に背を向け軽く手を振る。

( やっぱおかしいな )

「なんだったんですか？」

元の場所に戻ると将校が訪ねてくる。

「ただのイベントだ」

後で会社に問い合わせることを心の中で決め、適当に嘘であしらう。

もしかしたらイベントの可能性もあるが、あの変化の仕方はあり得ない。チャラ男が助けなければあの女性は死んでいただろう。

「さっ、帰るか」

結局この日はそのまま解散となった。

## プロローグ(後書き)

模試が近いぜ!!

(めんどくせえ)

## 法律の無い世界（前書き）

零の軌跡むっさおもろいです。

## 法律の無い世界

八宝高校

名前こそ立派なものの県内最低と噂される高校。

偏差値が低いのももちろん、暴力やら、他校の恨みを買っちゃらでとにかく最低な学校である。

そんな中、茶髪の少年『犬島 義人』は授業中でありながら堂々と携帯をいじっていた。

(なんか情報ねえかなあ)

ガシガシと頭を掻く。

昨日のうちに黒い影のことを会社に問い合わせたのだが、変身されたメールは

明日、そちらに伺います。

と来ただけ。

このメールが来たことによりイベントの可能性は完全に消え去ったわけだが……

明らかに情報が少なかった。

なので彼は暇な授業中に携帯で少しでも多くの情報を調べようとしていた。

(しっかしなあ、アレはバグだったのか?)

ネットの検索にも出てこないとなると、アレがまだ初めてなのかそれとも会社もしくは社長あたりがうまくごまかしたのか。

(まっ、そのうち分かるか)

ネットの力は偉大だと思っている彼はそのうちそれらしい情報が流れるだろうと思ひ携帯を閉じた。

ちなみに教師からは見て見ぬふりをされるほど悪事を働いていた。

「手詰まりかー」

だらーんと椅子にもたれかかる。

ポジティブなあとはネガティブなのは彼の特性である。

「今日の授業はここまでだ。ちゃんと復習しとけよな」

いかつい感じの教師が授業の終わりを告げるとともにチャイムが鳴る。

もともと騒がしかった教室がさらに騒がしくなる。

するといかつい教師もとい『木本』が彼のそばへと歩いてくる。

まるでヤのつく人が歩く感じだ。

「どうしたん?先生」

「どうしたはこっちのセリフだ。今から校長室に行け。いったい何をやらかしたんだ。」

「そんな数えきれませんよ」

「.....はあ」

額に手をあてため息をつく木本。

「いいから行って来い」

邪魔者を追い払うように手を振る。

「ハイハイ」

校長室に呼ばれる理由は大体わかる。

呼ばれる理由を想像しながら彼はニヤついた。

ところ変わって駅の近くのゲームセンター。

少し小柄な少年『鷲津 直』は有り金すべてをはたいて格ゲーをやっていた。

やっているのは最近人気の出てきた擬人格闘ゲーム『なすb』というものだ。ちなみになすびではなくなすbなのがミソらしい。

「・・・弱い・・・ッ!!」

赤の他人である人と向かい合いながら戦う。もちろん向かい合ってもゲームの台が邪魔なので顔は見えない。

気にする必要もないので楽だが。

結果は直の圧勝。

彼はこのゲーセンでは無敗の王として恐れられていた。

勝負を終えた時見計らっていたかのように携帯がなる。

着信の相手は義人だった。

「もしもし」

『もーしもーし!』

「・・・声が大きいです」

『おお。すまんね』

「で、なんです？用件がないのなら切りますよ」

『そんな冷たいから彼女ができないんだな。お前は』

「・・・切ります」

『ストオーパープ!!』

「じゃあ、なんなんですか」

『いやー、面白い話があるから校長室においでと言いたかったのさ』

「・・・今度は何やらかしたんですか」

『木本と同じこと言うなよ!』

こうして会話をしながらも直は学校へと歩みを進めていた。

八宝高校近くの公園。

『物部 語』は噴水前のベンチに腰かけていた。

何をしているのかと聞けば呼吸と答えるような考えしかない彼は暇だった。

多分この時の彼は

（あー、退屈だな。ナンパでもしようかな）

と考えていたりしているだろう。

それくらいワンパターの思考なのだ。

直の時と同じように携帯が鳴る。

「あいあーい。みんな大好き語君だよー」

『いいかげんその出方やめましようよ』

「おお、その言い方は直か」

『しかも誰だか確認してなかったんですか・・・』

「あつたりめーよ。そんなこと気にするほど俺は小さくないぜ」

『あなたが言うど皮肉が込められているようにしか聞こえません』

「まあ、皮肉ってるけどな」

『・・・義人先輩から伝言です。校長室にて待つと』

「りよーかい」

携帯を切り、歩みを進める。

ここから学校まで遠くはないが走ることにした。

この時彼には何かが起こると確信したようだ。

「そろつたか」

義人は校長室前に集まった二人を見て満足げに頷く。

「「今度は何の尻拭いだ（ですか）」

「今回は違うから！」

「「？」」

じゃあなんですかと直が聞こうとすると

「お客はこん中だ」

と言われ聞くタイミングを失う。

「お客って誰だし」

「会えば分かるよ」

ますますわけの分からないといった表情をする二人。  
今回ばかりは仕方ないかとおつぶやき扉に手をかける。

「さあ、入るぞ」

## 法律の無い世界（後書き）

バトルまでなかなかいかないものですね。

法律の無い世界2 (前書き)

中間試験の結果があまりにも悪かったです (汗)

や、やばい。

## 法律の無い世界2

扉を開けるとそこには校長先生とスーツを着た女性がいた。すると義人がおもむろに

「ボインは好きじゃないんだよなあ」

とつぶやく。

確かに女性の胸はイヤというほどに強調されている。しかもスーツがきついたためか物凄く張っている。

だからと言って初めて会った女性に言う言葉ではない。

しかし女性はまるで気にするそぶりも見せず、それは残念ですとだけ言った。

直と語は義人の頭を思い切りはたいたが。

「いきなりそのような言葉はいかがかと思いますが」

と校長が咳払いを一つしてから注意をした。

「うっさい。てか邪魔だよ、ジジイ」

「うっさい？ 私にそんな口を利かないでもらいたい！」

「ならうせ」

「てえい！ー！」

「うっごぶ！ー！」

これ以上は危険と判断したのか語が義人の背に掌打をする。

「でも確かに邪魔ですね」

先ほどまでほとんど黙っていた女性が校長、いやジジイにトドメをさした。

「な．．．！？貴女まで！」

啞然とした顔をする校長。

グサツと心に何か刺さった音がした気がする．．．いや、した。

「まあ、邪魔だな」

「邪魔ですね．．．」

校長を自害させたいとばかりに次々と邪魔発言をする。

「．．．．．。」

黙って出て行った。

一瞬かわいそうだと思ったらしい二人だが気にしないことにし、女性の方へ向かいなおす。

「で、何の用だい」

義人が全く誠意のこもっていない声で女性に問いかける。

二人はまたお前は、という顔をする。

「それは後ほどで。先に自己紹介させてもらっても？」

「．．．するなら早くしてくれ」

「ふふっ、ありがとう。やさしいのね」

「早くしてくれ」

「はいはい」

女性は義人の態度を見ても、軽く受け流し自己紹介を始めた。

「私の名前は『霧摩 楓』と言います」

まだそれだけなのに直と語は驚く。

なぜならその名前は『Lost tale』を作った会社である『PP』の現社長だからである。しかも若干27歳という若さである。

「それだけ聞けば分かりますね？」

また、ふふつと笑う。

どうやら自分の知名度がどれくらいであるかは把握しているようだ。

「いや、こんな美人が社長さんとはねえ。驚きだわ」

語は素直に驚く。

確かに楓はテレビに出たとしても恥の無い顔をしている。

「そんなことよりも本題に入りますよ」

性格は難ありのようだ。

「で本題というのは・・・？」

「そうね。・・・まずはこれを聞いていただけ？」

そついうと懐から最新式の音楽プレイヤーを取り出す。録音も音楽も聞けるといふ便利な代物だ。

楓はスタートボタンを押した。

数分後

「おいおい。マジかい、こりゃあ」

語が信じられないといった顔をする。

それも無理はない。なんたって会社に対する犯行予告をしてきているのだから。

完全独立のネットワークを持つPPにサイバー攻撃を仕掛ける、つまりLost taleを奪うと言っていた。

「なんでそんなもん俺たちに・・・？警察とかに頼めばいいんじゃないかねえか？」

「そんなことしたら会社の名に傷がつきますよ・・・先輩」

そんなことも分からないのかとジト目で語を見る直。

語は基本バカだからな、と義人が言う。

「ほっとけ」

語のバカさは本当にひどい。学年順位を下から数えた方ががぜん早い、というよりケツから十番以内に入っているほどだ。

「それで影のことは分かったのか？」

「いえ、今は何とも。しかし、可能性として一番高いのはやはり奴らからのサイバー攻撃ね」  
「？」  
「？」

影のことが全く分からない二人を見て呆れる義人。

「語はまだしも直もか」

「・・・あっ、もしかして」

「そう昨日のアレだ」

昨日のアレと言ったとき、やっと気づく語。

今回のことでさらに頭が残念なことがわかってしまった。

「でも何でNPCなんだ？」

義人はもっともな疑問を投げかける。

対し楓は、

「NPCの方がセキュリティが甘いからだと思います」

「・・・なるほどな」

当たり前だがNPCには個人情報がないためある程度のセキュリティしかない。対しPCは多くの個人情報が詰まっているため最重要ランクとして保管されている。

「・・・で、僕たちに何をしろと？僕たちにはゲームすることしかできませんよ」

「簡潔に言っわ。・・・これから起こるであろう妨害をいち早く阻止して」

今まで少しほんわかした感じだった楓が鋭い目線になった。さすが社長といふべきかかなりの迫力がある。

「……は？」

三人の声が重なる。

見事に重なる、これ以上にないくらい重なる。

「待て待て待て。妨害なんちゃらよりなぜ俺たちなんだ？」

ゲーム内に俺たちより強い奴なんて五万といる、と言いかける。

だがそれは事実で、種族リーダーはもちろんその直属の部隊の四季部隊、四大部隊、四心部隊もLvは低いが腕は全然立つ。

さらに言ってしまうえば上級の街に行けばLv70越えなんてざらにいる。

彼らがLv90越えだとしても全く歯が立たないだろう。

「だって律儀にメールで知らせてくれんだもん」

「それだけかよー！」

思わず突っ込む義人。

普段リアル面ではあまり声を荒げない彼にとっては珍しい光景だった。

ちなみにさっきから二人は黙っている。

「」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8372x/>

---

Lost tale

2011年11月16日20時22分発行